

---

# うさちゃん

宮根によこ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

うさちゃん

### 【コード】

N9092L

### 【作者名】

宮根よこ

### 【あらすじ】

私はあまり広くは無いけど・・・まあそれなりに綺麗なマンションへと引っ越してきた。荷物を整理していると、黄土色のすすけたうさぎのぬいぐるみを見つけた。

久しぶりにこの顔を見たとき、可哀想だと思った。首と頭がバラバラで、まるであの時のように惨い姿だったから。

## バイバイ

「それ舞由まゆのうさぎさん……………返してっ！」

舞由はあの子の前に跪いて、お気に入りのうさちゃんを返してもらえよう頼んだ。

あたりは黄昏の色一色に染まっていて、舞由という少女ははやくおうちに帰って温かいシチューを飲みたかったのだ。

でも、ここでうさちゃんを諦めてしまつては、夜ぐっすりと眠れない。

少女はまだそのくらいの齡。

「やーだ。もう近付かないでっ！さあ、いきましょアキちゃん」

あの子は舞由の大親友だったアキちゃんを盗んだ。

アキちゃんは物心ついたところからの友達で、ちよつとわがままだったけどいい友達だった。

それなのにあの子をとった。おまけに大事にしていたうさぎのぬいぐるみまで……………。

「ちよつとお、返してあげようよーっ」

アキちゃんはやっぱり友達思いだ。

舞由のことをちゃんと考えてくれてる。

でも、あの子はガンコで……………誰よりもわがままだから。

「じつしてあげるっ！」

夕暮れの公園の砂の温泉の中に、薄い桃色のうさぎの縫い包みが浸

っている。

泣いても仕方がないと少女は立ち上がった。

帰るあの2人の子供の背中をおもいっきり押してやりたかった。

でも、うさぎの縫い包みの瞳をのぞくと「大丈夫」と言っているようだった。

そんなことを考えながら独りでどろんこあそびをする。

大粒の涙をぬぐったため、幼い顔は砂で汚れていた。

「ああ・・・うつ・・・うつ・・・」

うさぎさんは無残な姿となっていた。

首からきれいに？ぎれてしまっていた。

家に帰れば温かい夕食と、手術をしてくれるお医者様だっているはず。

だけど、今は最高に悲しみのどん底へと落ちている真っ最中。

開き直る気もさらさらない。少女はさっきまでうまっていた穴にもういちどうさぎをつめた。

「ごめんね・・・・・・バイバイ・・・・・・」

紫とピンクでできた幻想的な天井の下、少女はうさぎに別れを告げて公園を後にした。

うさぎを生き埋めにしたことはママには内緒にした。

ママに気づかれぬ間、いそいで洗面所に駆け込んでどろまみれの手と顔を洗った。

## バイバイ（後書き）

一応、ホラー小説にするつもりです。  
たぶん、それほど恐くないかもです。

なるべくエログロは避けようと思ってます。  
すぐグロテスクなのを入れたくなっちゃうんですが・・・自重します。

## 味

狭い個室に、茶色い山ができています。段ボール箱の山である。ちよつと都会がうらやましくなつてここへ越してきた。お金はんばつて仕事やバイトをこなし、親戚からの助けもありなんとかこの中古マンションを借りることになった。

とりあえず片づけていく。後回しにしたって疲れるだけだし……。  
……。  
そろそろ髪でも切ろうかと思つ。あつついし、髪もだんだんのびてきたみたいだし。

「あつ……これ……」

懐かしいふつかふかの感触、そして上の方のもわもわ……。  
ちよつとすすけて砂だらけだけどまだあの桃色はわかる。  
そう、それはあの日惨い姿のまま土に返してあげたあのぬいぐるみである。

もちろん、あの日のまま。頭部がバラバラのまま。

「縫つてあげなきゃ」

もうちよつと落ち着いたらさつそくこの子のオペを始めようと思つ。まだ薄暗い部屋にひとりでちよつと心細かった所。物音ひとつしない部屋がどんなに熱くても冷え切つてる気がする。ちよつと痛々しいけど、きみは私の部屋となるベッドルームにしばらくこのままいてもらつことにしよう。

荷物をよけながらようやくたどり着いた部屋。

こちらまで暗がりの世界かと思っていただけ、あんがいリビングより日当たりがいいみたい。

白いひかりがやんわりとわたしたちを歓迎している。

さあ、うさちゃん。あなたは今日からちよっとの間、その首と体を並べておくよ。

何年間もそうして別々でいたのだから、数日間ぐらい我慢してくれるよね・・・？

なんとなくあの人違う顔のように感じた。汚い桃色のうさぎの顔が。

数日後、やっと荷物が片付いたのであの例のうさぎをなおしてあげようと思う。

お裁縫箱は片付けずに出しておいた。もう使う事などあまりないと思うけど。

右手に裁縫箱、左手にはさみを装備してベッドルームへと足を踏み入れた。

相変わらず明るい日差しが薄いカーテン越しにも伝わっている。

さて、うさぎうさぎ・・・

「あらっ・・・？」

私は朝、まったく気付かなかった。

よくみたらうさぎさんの右の後ろ脚がもげている。

やっぱり古かったから色々ほころびていたのだと思う。

首と足がとれてうさちゃんも気持ち悪かっただろう。いますぐ私が直してあげる。

「あとでお洗濯しなきゃねえ・・・」

できあがった。きつと買った時よりも不格好で哀れなものになって

しまったと思う。

元から私はそんなに器用でもなかったし、くつついただけマシだと思っ  
てね。

「お気に入りであったのもなっとくかも……………」

なんだかうさぎの目はまるで生きているかのようで、「ありがとう」と  
小さな声で呟いているように見えた。

人形とアイコンタクトをとれるまでになったのかな。なんてね

でも見つめるうちに洗脳でもされたのか、汚れたうさぎがとても可愛  
く見えてきた。

すっごく味があって……………どうしてあの時おいってきたのかわから  
ない。

本当にごめんよ、ごめん……………。

「さあーて、風呂風呂っ」

後から湯船から跳ね上がり、ドタバタドタバタとベッドルームへ戻  
った。

なんとなく、あのぬいぐるみがきになって……………つい、風呂  
に入れてみた。



## 味（後書き）

最初はそのまま普通の人形として主人公にはぬいぐるみを置いてほしかったのですが、今PCのとなりにあのうさぎの色と同じようなあわいピンクのブタさんがおりまして、私は凄くその子が大好きで毎日添い寝しています。

もうかれこれ6年目の付き合いになる彼女ですが、色がうすくなっています。

もう妹的存在ですね。いつも玄関に置いて帰りを迎えてくれるわけですが……………。

可愛いです。ずっと一緒です。

彼女がきつと一番私という辛いと思う時間は豚肉の出るゆづげの時でしょう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9092/>

---

うさちゃん

2010年10月14日14時31分発行